近世京都手工業生産プロジェクト

京都の伝統工芸技術

和田晴吾、木立雅朗

概要 窯業を中心にして、京都の伝統工芸の技術と社会との関係を検討するため、以下の3つの大きな作業を行った。一つ目は鳴滝乾山窯跡の発掘調査であり、これにより京焼窯が築かれる土地の歴史とその脈絡について明らかにすることができた。二つ目は昭和30年代に操業を停止した五条坂・道仙化学陶器所窯跡の発掘調査である。3つ目は五条坂・藤平陶芸が所有する陶器製手榴弾弾体の整理検討であり、各地の陶器製手榴弾弾体と製作技法・寸法を比較検討することで、当時の軍部の命令系統や窯業界の対応について多くの知見を得る事ができた。そのほか、西陣織正絵のデジタル化や石造物の検討、須恵器窯跡の分布調査など幅広い検討を行い、京都の窯業を中心とした伝統工芸と社会との関りについて総合的、かつ、通時的に検討するように努めた。

Production of traditional handcrafts in modern Kyoto project

Techniques for Traditional Handicrafts in Kyoto

Wada Seigo　Kidachi Masaaki

Abstract To examine a relation between techniques of traditional handicrafts and society in Kyoto mainly related to a ceramic industry, we conducted the following three big surveys:
Firstly, we conducted an archeological excavation and a research on remains of Kenzan drying kiln at Narutaki, which could clarify a history of the land at where Kyoto-ware kiln has been created from as well as its cultural context. Secondly, we conducted an archeological excavation and a research on kiln remains of Tousen chemical porcelain company at Gojo-zaka which had ceased its operations in the fourth decade of the Showa Era. Thirdly, we organized and considered main bodies of ceramics hand grenades owned by Fujihira Pottery. Co., Ltd. at Gojyo-zaka and compared their manufacturing techniques and size with those of ceramics hand grenades around the country, which enabled us to acquire a lot of knowledge of a command structure of then military and responses of ceramic industry. Other than those above, by widely conducting a digitalization of patterns on fabrics, an examination of stonework, and a study of distribution on kiln remains of unglazed ceramic ware, we attempted to examine, comprehensively and diachronically, a relation between traditional handicrafts and society mainly in ceramic industry in Kyoto.

1. 京都市・鳴滝乾山窯跡の発掘調査

京焼窯跡の考古学的研究はその重要性に反して著しく遅れている。近世遺跡の調査が各地でめざましく進む中、平安京から1200年に至る日本最大・最長の都市遺跡を抱えた京都の罪と悩みは大きい。そのような中で京焼窯跡初の正式な発掘調査として鳴滝乾山窯跡の調査を行った。調査は2000年に法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団を組織して開始し、2002年度からは立命館大学21世紀COEプログラム京都アートエンタテイメント創成研究との合同調査となっている。本年度は5年目の最終年度であったため、以下に過年度分の調査も含めて調査成果をまとめる。

(1)尾形深省と鳴滝乾山窯跡

乾山は仁清と並ぶ京焼の二大スーパースターである。尾形乾山とも言われるが、その本名は尾形深省であり、野々村清右衛門(仁清)に陶技を習い、鳴滝泉谷の地で1699年に開窯した。1712年には洛中の二条丁子屋町の兄・光琳の屋敷近くに移り住み、借窯による「焼物商売」を行ったと言われる。後には江戸に移り、入谷や下野・佐野で焼き物を続けながら、元文二年には『陶工必用』や『陶磁製方』を表している。『陶磁製方』には「京城之西北ニ當テ鳴瀧山ト申辺私中年ノ比より閑居仕候所ヲ乾山ト号焼始候陶器ノ名ニ相記シ候」とある。また、養子の猪八が「只今ハ京鴨川ノ東聖護院　宮様御門境ニ而本焼内焼共相勤罷有候」とあり、乾山焼にはいくつかの段階があったことが分かる。鳴滝窯跡は、「乾山焼」の名前を生み出した記念すべき発祥の地である。

(2)発掘調査の概要

①1区－百拙墓参道脇－の調査

鳴滝窯跡は、京都市右京区鳴滝泉谷町・黄檗宗法蔵寺の敷地内に所在する。昭和初年、檀家の春日純精氏によって発見され紹介された(春日1930)。 周辺は1980年代以降の墓地造成によって大きく改変されたが、窯の存在が想定された地点に「尾形乾山陶窯跡地」石碑が建立(1962年)されており、その部分の発掘を行った。

この地点(1区)からは多くの窯壁片・窯道具片・製品・未成品などが出土したが、ごくわずかに含まれる遺物から、近代以降、窯発見直前の工事か、発見後の遺物収集によって移動された二次堆積の物原層である可能性が高い。ただし、ごく近くに窯が存在したことは間違いない。

その下層をさらに掘り下げたところ、石段遺構が検出された。石段は螺旋状に登ってゆく、蹴上げの低いものであった。石を正確に円弧状に配置し、青や黄色の石を絶妙に配置した優美なものであり、通常の石段とは様相を異にする。石のない部分や平坦な部分には細かな砂利が敷きつめられていた。この砂利敷き通路は山を削って作った崖ぎわに沿っており、現在の参道に従って曲がりながら法蔵寺本堂方向に伸びている。トレンチ内では路面は幅1m以上あった。

この石段を埋めた土層からは17世紀後半の土師器が数点、石段路面の直上から同じく17世紀後半の白磁(有田の濁手)1点が出土している。なお、この埋土の上層には窯壁がわずかに含まれていた。石段は17世紀後半のうちに埋められ、埋没過程で窯壁が若干混入したと想定される。尾形深省(乾山)は1694年に「二條家山屋敷」を譲り受け1699年に開窯しており、ちょうどその時期に近い。こうしたことから、石段遺構は「二條家山屋敷」に係わる遺構と推定している。

②墓地周辺(5区)の調査

1　区の調査によって窯や物原はそれより高い部分にあったと想定された。その可能性のある地点はすでに墓地が造成されており、十分に調査することができなかったが、通路部分に限った試掘調査とボーリング調査の結果、想定地点にも窯や物原はほとんど残っていない可能性が高くなった。また、この調査によって現状では平坦だが、小さな谷状地形が2本以上埋められていることが明らかとなった。ごくわずかに窯関連の遺物が出土する程度である。試掘トレンチでは谷を埋めた地形の上に白色粘土を敷きつめた整地面を検出した。この地点は現在の法蔵寺本堂が立地する広い平坦面より高く、さらに見晴らしがよい。1区で検出された石段は見晴らしのよいこの地点に上るための通路だと考えられる。

③法蔵寺本堂周辺の調査

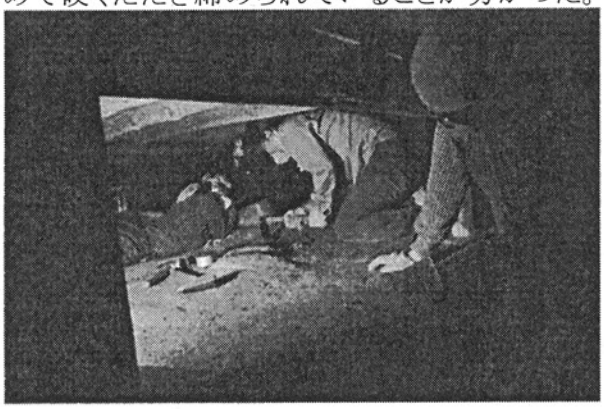
本堂周辺にもいくつかのトレンチを入れて調査を行ったが、窯関連の遺構は検出できなかった。しかし、明治期の法蔵寺関連の溝を検出し、多量の煎茶関連遺物を出土した。そして、本堂の大半が盛土の上に建築されていることが判明した。また、登窯や上絵窯などはほとんど出土しないのに対して、製品の失敗品が一定程度出土していることから、工房などが存在した可能性が想定される。

この地区でもっとも重要な成果は、地表面より30cm程低い遺構面で砂利敷き通路を検出したことである。砂利敷き通路は幅約60～70cm、3本に枝分かれした総延長13m以上分を検出した。しかも、この通路はかつての法蔵寺本堂の真下に

のびており、本堂落成以前の遺構と想定される。

④法蔵寺本堂と床下の調査

現在の本堂間取りと床下の調査を行い、天井裏の観察も行った。その結果、落成当時の痕跡が床下の土間や束石、屋根裏によく残されていることを確認した。当寺の落成時の状況については法蔵寺を落成した百拙が記録した『改観手録』に詳しく記されており、その絵図ともよく合致する。また、床下は土間以外の部分も硬く叩きしめられており、瓦葺き礎石建物の基礎工事であったと想定される。この部分は断ち割り調査の結果、地表下約30cmまでは硬く、約10cmまでは極めて硬くたたき締められていることが分かった。



法蔵寺本堂床下の発掘作業

⑤法蔵寺周辺の地形改変

周辺のトレンチ調査やボーリング調査の結果、現在の地形は大きく改変された結果であることが判明した。現地踏査でも推測できることだが、斜面を「切り盛り」し、小さな谷や窪みを埋め立て、広い平坦面を雛壇状に造成していることが確実になった。その造成時期は出土遺物が少ないため断言できないが、砂利敷き通路や螺旋状石段の検出状況から、「二條家山屋敷」の造成段階から一定程度の改変が行われたことは確実である。

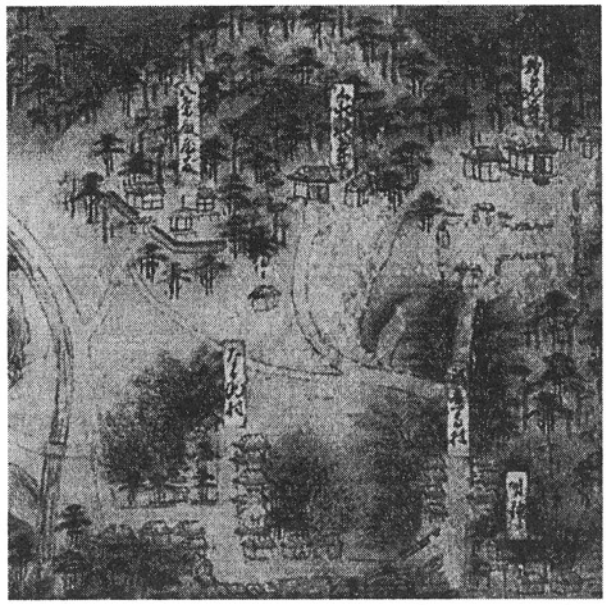
(3) 土地の履歴と「乾山焼」

－法蔵寺に至る歴史的脈絡－

2003年7月25日に開催した立命館大学21世紀COEプログラム「京都アートエンターテイメント創成研究」シンポジウム「江戸時代の京都と鳴滝乾山窯－二條綱平と百拙をめぐって－」によって多くの重要な指摘がなされた。尾形深省の譲り受けた「二條家山屋敷」は「鳴瀧二條殿御茶屋」とも呼ばれ、天皇・上皇が行幸するような重要な「御茶屋」であったこと、そのような由緒ある庭園のなかで乾山焼が焼かれたことを指摘した中ノ堂一信氏の報告は特に重要であった。中ノ堂氏は、修学院離宮における修学院焼が乾山焼を理解する上で重要な鍵を握るとも指摘しており、乾山焼のみならず京焼研究の重要な側面を示したと言えよう。この指摘を受けて、当地の歴史的脈絡の上に「乾山焼」を位置づけることが重要な課題であることに気づかされた。

また、最近、垣内拓郎によってさらに次の3つの事実が判明した(法蔵寺他2005a・b)。

(1)「鳴瀧二條殿御茶屋」の前身が「八条殿屋敷」であった可能性が高くなった。出土遺物も17世紀前半のものを含んでおり、矛盾しない。桂離宮などの御茶屋と同時期に相次いで開発されたのだろう。詳細は省くが、この事実は御茶屋の運営・所有の問題とともに、『洛外図』成立年代の問題にも波紋を投げかける。



『洛外図』の「八条殿屋敷」(左上部分)

右下は「明神」(福王子神社)、右上は妙光寺

(2)従来、当地は尾形深省から桑原空洞に譲られ、百拙元養は空洞から土地を譲り受けて黄檗宗法蔵寺を落成したと考えられてきた。しかし、京都府の行政文書に記された「古券三通写」の発見によって、実際には正徳3(1712)年に尾形深省から菱屋十兵衛に、享保8(1723)年に菱屋十兵衛から肥前屋善七に、享保14(1729)年に肥前屋善七から鳥居道乙に転売され続けたことが明

らかになった。鳥居道乙以後の譲り渡しは不明だが、享保16(1731)年頃から黄檗宗の僧侶である百拙元養が住み、元文4(1739)年には近衛家の援助によって法蔵寺が落成したと考えられているため、桑原空洞の関わりが具体的にどのようなものであったのかが問題となる。

(3)行政文書の調査から、明治5～16年の間に法蔵寺の本堂が縮小され、ほぼ現在の姿になったことも明らかになった。このことは発掘調査で近代以降のゴミ穴が多く、近代以降に土地利用のあり方が変化したと考えられることと一致する。

発掘調査では、現本堂床下で確認された叩き面が、明治以降に縮小した部分で途切れていることを確認した。『改観手録』では屋根構造を草葺から瓦葺きに変えたと記されているがそれは庫裡部分に限られた可能性がある。通常、茶室建築などでは叩き締め基礎工事を行わないと言われるため、この基礎工事は百拙が庫裡部分の屋根構造を茅葺から瓦葺に変えた時に基礎工事ごとやりかえられたものである可能性が高い。明治になって解体された部分は近衛豫楽院が寄進した近衛家旧御殿部分であり、檜皮葺であったと想定される。発掘調査から檜皮葺部分では叩き締め基礎工事を行わなかった可能性が想定される。明治以降、屋根の維持の面でも解体せざるを得ず、瓦葺き部分だけが残されたと想定すれば理解しやすい。

そのように考えれば、当時の建物落成期を遡ることはなく、それ以前、特に乾山段階の一部が残されていると想定した従来の考えは再考を要する。少なくとも基礎工事を含めた大工事を伴ったことは確実である。

(4)出土遺物の概要

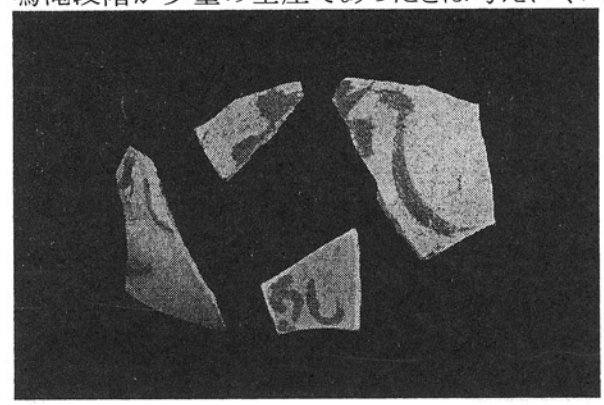
発掘調査で出土した遺物のほとんどは1区から出土している。その約9割が窯道具と窯壁だが、1区以外の調査区では窯道具と窯壁はほとんど出土していない。

①製品

製品のかなりの部分は未製品である。色絵・銹絵・白化粧が施されているもの、素焼きの角皿の一部、軟質施釉陶器のほか、磁器素地なども見られた。伝世品と一致するものもあるが、当てはまらないものもある(荒川2002参照)。仁清風の製品も意外に目に付く。伝世品では「鳴滝時代」、「二条丁子屋時代」、「聖護院時代」などと分けられているが、この遺跡には典型的な「鳴滝時代」のものもあれば、そうではないものもある。そのため、一般的な「鳴滝時代の乾山焼」とはやや印象を異にすると感じる方々が多いように思われる。今後、同じく発掘された「聖護院乾山」との比較を通じて伝世品を中心に形成された乾山像の再検討を行う必要がある。発掘された「聖護院乾山」と当窯出土品(「鳴滝乾山」)には一部に共通点があるとはいえ、明確な器種差や器形差、意匠の差が確認される。資料整理が途中だが、「鳴滝時代」と言われている伝世品には、発掘された「聖護院乾山」に近いものが一定量あるように感じている。

「乾山」銘について

出土した「乾山」銘を観察すると、すでに文字がかなり退化しているものが目立った。一点ものや大物は確かに伝世品から推定された「鳴滝時代」の銘と同じであるが、小物や数ものは鳴滝窯から銘が退化していることが明確であった。また、そのような数ものが鳴滝窯の段階から一定量生産されていたことがわかる。一般的には「二条丁子屋時代」から本格的な「焼物商売」に入ったと想定されていたと思われるが、こうしたことから、鳴滝段階が少量の生産であったとは考えにくい。



鉄絵による「乾山」銘

②窯道具

匣鉢、輪トチン、足付きハマなど、基本的に瀬戸・美濃系の窯道具が多量に出土している。その反面、肥前系と思われる窯道具はほとんど出土しなかった。このような窯道具のあり方は、御

室仁清窯で採集された窯道具の状況とほぼ変わりない。また、京焼窯の民俗例とも近いが、一部に独特の窯道具が確認され、その系譜や使用方法について今後検討する必要がある。

③窯壁片－上絵窯と登り窯の破片－

出土した遺物の大半は窯壁や窯道具類であった。中でも炭を燃料とした上絵窯が確認され、明治時代の『陶磁器説図』・『陶器楽草』の上絵窯や交趾窯と酷似している点が注目される。京都では明治頃まで炭を使用する上絵窯と薪を燃料とする上絵窯（「金薪窯」）を使用していたが、昭和の初め頃に「金炭窯」はほとんど廃れ、現在ではその使用を知る人もほとんどいない。中国の景徳鎮窯では清代から使用されていたが、その技術系譜を探る上で重要な発見である。また、オオゲタと呼ばれている粘土ブロック（肥前で言うトンバイ）がすでに使用されていることも判明した。オオゲタは御室仁清窯でも採集されており、匣鉢積みの技術や焼締陶器などの製品から、御室から鳴滝への連続性が確認される。ただし、製品のなかにはどちらか片方でしか確認できないものもあり、連続しない部分もある。

（5）小結

発掘調査では多量の遺物が出土したにも係わらず、窯跡そのものを検出することはできなかった。１区での窯壁片や窯道具の出土から、窯体がすぐそばにあったことは確実だと想定されるが、現地の情況からこれ以上調査範囲を広げることはかなわない。しかし、当地の土地履歴がより一層明らかになった。「八条殿屋敷」から「鳴瀧二條殿御茶屋」に至る経緯は不明だが、砂利敷き通路や螺旋状石段はまさしくその一部であろう。また、「八条殿屋敷」から近衛家ゆかりの法蔵寺落成に至る変化は、持ち主が度々入れ替わりながらも、当地がサロンの場として維持されたことを示している。拙文は、窯体を検出できなかったことに対する言い訳に過ぎないのかもしれないが、窯を検出しにくい理由がそこにあるのではないかとも思える。このような庭園内に瀬戸や有田のような窯場を想定すること、このような場所で遺構が朽ち果てたまま放置され残存すると想定すること自体に無理があるのではないだろうか。

検出された石段の上にある墓地に立てば、往時はかなり見晴らしがよい高台であったことが分かる。また、この土地は二條家の手を離れても、文人や公家との関係が切り離せない由緒ある土地でもあった。乾山焼はそのような土地で焼かれはじめたが、わずか13年でこの地を巣立っていった。

この土地の歴史的性格を生かした焼き物がなぜこの土地を離れてからも「乾山焼」を名乗り続けることができたのだろうか。御菩薩池焼とあわせてその名称の問題は未解決であるが、演出を重視した場合、その場が生産の場から販売する場へと移行したことを示しているのかも知れない。

京焼の考古学的研究は単なる窯場の研究であってはならないことを、今回の調査は教えてくれた。その土地の性格や由緒を最大限に利用し、様々な演出の中で製作され、焼成されたと想定される乾山焼のあり方は、他の産地とは大きく異なる。演出された小道具の検討にとどまらず、その舞台の研究も見過ごすわけにはいかないのである。そのためには様々な分野からの検討が不可欠である。

当地の研究は、御茶屋・乾山焼・法蔵寺の3つの立場の研究者によってなされてきた。しかし、3つの立場の研究者たちはその領域を越えることが少なく、結局は研究を深めることができなかった。乾山焼に関心をよせた研究者は、美術史・陶磁史・窯業史・文化史・考古学など多岐にわたり、あたかも多面的な研究が行われていたように思えたが、その多面性がわずか13年の間に集中していたことは間違いない。今回の発掘調査はまさしくそうであり、当初は窯を検出すること、良好な遺物を得ることに血眼になっていた。御茶屋の研究者は資料不足が著しく、絵画資料から「八条殿屋敷」の存在を指摘する程度であった。

結局、多くの分野の研究者たちはこの土地の歴史、地域史に対して思ったより無関心だったのではないだろうか。

今回の調査成果の中で、それらの研究が地域史研究の一貫のなかでこそ深化するということを明らかにできた。あらためて地域研究の一貫としての考古学の役割について考えさせられた。

《参考引用文献》

春日純精1930「乾山窯址発見について」『京都史蹟』巻一ノ三

川喜田半泥子(泥仏堂無茶法師)1943『乾山考』乾山考刊行会

R・L・ウィルソン／小笠原佐江子1992『尾形乾山－全作品とその系譜－』雄山閣出版

荒川正明2002「掘り出された乾山焼の実像」『淡交』685号(第五十六巻第四号)

法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団・立命館大学文学部・立命館大学21世紀COEプログラム京都アートエンターテイメント創成研究2005a『鳴滝乾山窯跡－第1次～5次発掘調査概報－』

法蔵寺鳴滝乾山窯址発掘調査団・立命館大学21世紀COEプログラム京都アートエンターテイメント創成研究2005b『鳴滝乾山窯跡第5次発掘調査速報』

京都国立博物館編1997『洛中洛外図　都の形象―洛中洛外の世界』淡交社

2. 道仙化学陶器所窯跡の発掘調査

本窯は京都市五条坂に所在する、昭和36・37年頃に廃業した窯元・入江道仙の窯跡である。

道仙化学陶器所窯跡の現状

乳鉢の質がよく、評価が高かったという。現在は楽只苑の所有となっており、鰻の寝床の敷地内の奥に、作られている。敷地の形状から自然地形を活用することはかなわず、それを無視する形で掘り込みと盛土によって小規模な連房式登り窯を築造している。なお、北側に隣接した浅見窯は入江家とは親戚筋にあたり、入江窯に平行してやや小規模な連房式登り窯が築かれている。興味深いことに、両者とも鰻の寝床という限界のある土地を最大限に活用し、しかも隣り合わせで胴木間と排煙部の向きを逆にしてあたかも寄り添うかのように作られている。「都市型連房式登り窯」の典型例として評価される。

入江窯は廃業後放置されていたが、危険なため故意に崩されていた。窯の天井部材や壁材などが大量に残されており、発掘作業では窯壁の多さに辟易させられるほどであった。発掘調査は現在も継続中であるが、6室程度あったと言われる最後の部屋をほぼ完掘した。さやなどの窯道具が原位置で残されており、当時の窯詰め状況を知る上で重要な成果を得た。また、別の部屋では化学陶器が積み上げられたままの状況であったり、さやを大量に積み上げてあったり、近世以前の窯の調査と比べて、格段の情報量を持っていることを実感できた。窯の全形は不明だが、直壁式と言われる長方形の平面形をした中規模程度の窯であったと想定される。

ここで生産された化学陶器は工業製品であるが、中小企業の街・京都を示す重要な製品である。時代は新しいが、京焼や京都を相対視する上でも重要な資料になる。

道仙化学陶器所窯跡の発掘状況

3.「本土決戦」に備えた陶器製手榴弾

(1) 京焼・清水焼のもうひとつの側面

京焼・清水焼は雅びで華やかなイメージが強

い。しかし、京セラや村田製作所が京焼から生まれたベンチャー企業であることを知る人は意外に少ない。京焼では戦前から碍子や理化学陶磁器などの工業製品の焼成も手がけていた。先述の道仙化学陶器所もその一つである。

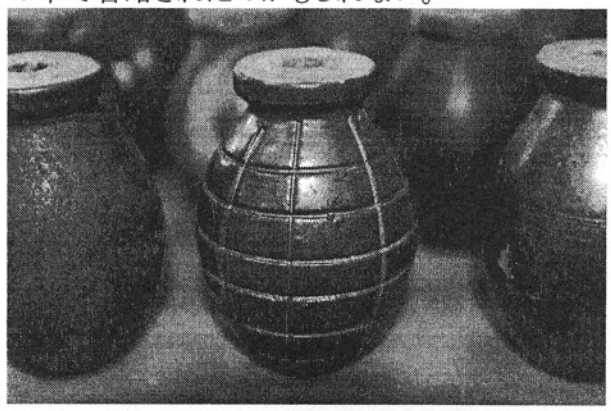
太平洋戦争の末期、いよいよ「本土決戦」が迫りつつあった頃、金属不足のため軍部が陶器製手榴弾の弾体を作らせたことはよく知られている。各地の窯業地と同様、京都でも陶器製手榴弾の弾体が製造された(以下、弾体を単に陶器製手榴弾と呼ぶ)。

(2)五条坂の陶器製手榴弾

五条坂にある藤平陶芸で合計254個におよぶ陶器製手榴弾の弾体を分析できた。出荷する前に終戦を迎えたため長く地中に埋められていたが、工房建設工事中に掘り返されたのである。その工事から年数がたっており再調査させて頂いた。社長さんから「沢山あったはず」と伺っていたが、200個を越える手榴弾が出てきたときには大変驚かされた。手榴弾再発見に居合わせた本学4回生萬野翔子さん(日本史学専攻考古学コース)は立命館大学21世紀COE京都アートエンターテイメント創成研究の一部を担当し、これら全点の計測を行い、各地の陶磁器製手榴弾と比較し、卒業論文にもまとめた。その成果は大変興味深く、考古学研究の裾野を広げ、平和運動や戦跡考古学に新しい視点を提供するものである。2004年の夏に藤平陶芸においてその展示会を行い、木立と萬野さんによる講演も行った。以下は調査中の成果の一部である。

(3)陶器製手榴弾の規格性と容量

藤平伸氏らによると、陸軍の命令を受けて陶器製手榴弾を製作したが、藤平陶芸では動員された一般の人々の手によって鋳込み成形され、陶工が轆轤で削って調整したという。計測の結果、外形の寸法は規格性が確認できたが、重さ・容量には大きな差が確認された。重いものは容量が小さく、軽いものは容量が大きいため、器壁の厚みが違うことが分かる。鋳込みは簡単な型作りだと思われがちだが、うっかりすると厚すぎたり薄すぎたりして均一に仕上げることは難しい。もっとも容量が少ないのは24ccで重量271g、もっとも容量が大きいのは56ccで重量209gである。容量の差が2倍以上ある。見た目の規格性の反面、武器としての機能には大きな差があっただろう。なお、256点中2点だけ外面にパイナップル状の刻み目を入れたものがあった。これらはともに容量52cc、重量206gで釉薬・色調も含めて整っている。見本的な製品だったのだろうか。その他はすべて轆轤で削っただけで刻み目は施されておらず、容量・重量・色調にも厳密な規格性は認められない。刻みは終戦間際の混乱の中で省略されたのかもしれない。



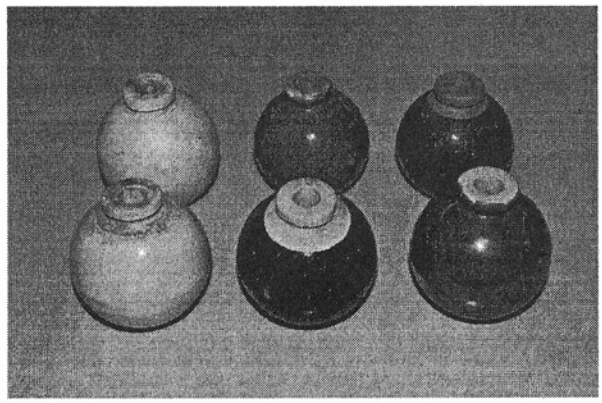
五条坂・藤平陶芸の陶器製手榴弾弾体

(4)備前焼の陶器製手榴弾

京都と同じ形の陶器製手榴弾が備前でも製造されていた。伊勢崎淳氏によると、戦時中、宮山のふもとで爆破実験が行われたという。爆破実験は有田でも行われているので、各地の窯場で性能をテストしたのだろう。伊勢崎家では石膏型で手榴弾を成形し800個作ったという。終戦直後、進駐軍がそれらをすべて割るように命令し、その監視のもと、幼かったご自身も手伝って割らされた。割ったものは家の敷地内に埋めて処分したという。大半はこうして窯場で捨てられたが、木村興楽園の木村純雄氏によると先代のご主人から1回か2回は出荷し、終戦直後、「大阪城にある軍隊」に集金にいってその代金をもらってきたという。当時の大阪城には砲兵工廠をはじめとする陸軍関係の施設があった。また、新聞記事によると故山本陶秀氏は昭和20年の春、「当時の軍需省から京都窯業試験場を通じて突然、手りゅう弾の弾体作りを命じられ」たと述べている。京都と備前の関係は、陸軍と京都窯業試験場を介してつながっていたのである。山本陶秀氏は

進駐軍が来る前に手榴弾を埋めていたが、なぜか掘り返せとは命じられなかった。そのため、自宅改築時に多数の完形品が出土することになるのだが、普通は進駐軍の命令で割って捨てられた。藤平陶芸も珍しい例なのだろうか。山本陶秀氏は轆轤の名手といわれ後に人間国宝に指定された方らしく、手慣れた轆轤作りで弾体を成形した。桃蹊堂も轆轤成形であった。細工物・型成形を得意とする木村興楽園は伊勢崎家と同じく型作りであった。このように、備前では成形方法が一定していない。品質管理は製作技法にまでは及ばず、大きさと形だけを揃えてそれぞれが得意とする技法で製作していた。こうしたことは後述するように形は違うが信楽でも同様であったと思われる。なお、備前ではほとんどの手榴弾に刻み目があったが、桃蹊堂出土品3点中1点だけ刻み目が省略されていた。

(5)手榴弾を完成させた埼玉県川越市・浅野カーリット工場の陶磁器製手榴弾

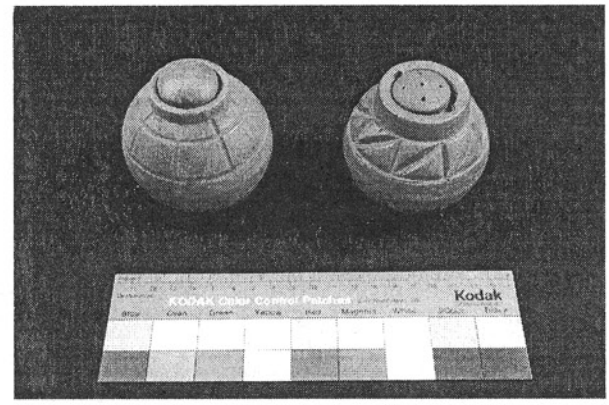


浅野カーリット工場跡出土陶器製手榴弾弾体

浅野カーリット工場跡から出土した6個の陶器製手榴弾が本学の国際平和ミュージアムに寄贈されている。この工場では各地で製作された陶器製弾体に火薬を詰めて完成させ、相模海軍工廠に納品していた。弾体はすべて丸形で刻み目がない。土や形状、統制番号などから有田焼、信楽焼、瀬戸焼が確認されるが産地不明のものもある。大まかな形は同じだが、産地によって僅かに寸法が異なる。釉薬の色も産地によって異なる。この丸形はガラス製毒ガス弾を模倣した可能性が高く、京都や備前のような金属製手榴弾模倣品とは形が違い、容量も大きい。

美濃でも製造されたが、美濃のものは特殊な刻みがある小さな丸形で、どの産地とも違うタイプであった。胎土にマンガンを混入したと言われることも含め、他に類例を確認できない。

丸形は硫黄島や沖縄本島で使用されており、現在でも両島では爆破処理の対象となっている。準備期間も京都・備前や美濃より若干長かったのかも知れない。丸形、京都・備前型、美濃型の3タイプは用途や性能、あるいは発注時期が違うのだろうか。それとも発注者である陸軍と海軍の差だろうか。残された課題や疑問は多い。



美濃で作られた陶器製手榴弾弾体

(6)新しい時代の考古学研究

近年、戦跡考古学や近現代考古学が発展しつつある。文書が意図的に廃棄されたり文書に記載されにくい事柄があること、人々の記憶が非常事態のなかで曖昧であったり全体像を把握できなかったりすること、戦後59年をへて語り部が「ひと」から「もの」に移り変わろうとしていることなど、多様な理由で戦争に係わる考古学研究が存在意義を増しつつある。各地の窯業地が総力を挙げて陶器製手榴弾などの武器生産に立ち向かったことは、軍部が真剣に「本土決戦」の準備を進めていたことを物語る。そして、京都の近代産業を支えた窯業の一面を特徴づけるものでもある。陶器製手榴弾は紹介したように各地でも生産されたが、京都だけは毒ガス精製装置やロケット燃料精製装置などの精密な理化学陶磁器や陶銭も生産し、「工場の町」京都の姿を明示する。私たちの足もとを見つめなおすためにも、陶器製手榴弾から見た京焼の近現代史はユニークで重要なテーマになるに違いない。

「京都の陶器製手榴弾展」の様子

五条坂・カフェギャラリーふじひらにて

その他

上記にほかに、西陣織の正絵（下絵）のデジタル化作業、石造物の民俗考古学的調査、伏見人形・弓野人形の民俗考古学的調査なども行っている。また、亀岡市篠窯跡群（奈良平安時代須恵器窯跡）の分布調査によって新たな遺跡を複数発見するとともに、篠特有の「小型三角窯」の構造と焼成技術について新しい解釈を示し、従来の認識が近代のまなざしによってゆがめられていることを明らかにした。

こうした研究により、京都の伝統工芸と社会との関りについて総合的、かつ、通時的に検討するように努めた。窯業を中心にせざるを得ないが、今後も、考古学・地域史の方法論を駆使する事で、脈絡のある京都の歴史の一面を照らし出してゆきたい。